

石見銀山遺跡周辺の宝篋印塔 －搬入品と在地品の調査から－

間野 大丞

はじめに

石見銀山遺跡の石造物調査事業は平成9年度（1997）から始まり、今年度で25年を迎えた。これまでの調査研究により、石見銀山の周辺地域（旧邇摩郡・旧安濃郡）における銀山開発以前の石造物の様相を明らかにすることが課題のひとつとなっている。

当研究事業においては、平成27年度に旧安濃郡に所在する中世の大型石塔、令和2年度に保国山金皇寺（仁摩町大國）の石造物群について調査をおこなった（西尾・東山2016、島根県・大田市2021、間野・伊藤2022b）。令和2年度からはテーマ別調査研究「港町温泉津の景観と変遷」においても旧邇摩郡の調査を実施し、温泉氏墓周辺の石造物（温泉津町湯里）等について報告をおこなっている（間野・伊藤2022a）。

このほかには今岡稔と今岡（佐藤）利江による報告（今岡2004、今岡・今岡2004、同2011）のほか、発掘調査によって資料が蓄積されている（島根県2017、同2019）。

本稿では、令和4年度に石見銀山遺跡周辺で実施した搬入品と在地品に関する調査の成果を報告する（第1図）。なお石造物の石材については、三瓶自然館の中村唯史氏にご指導いただいた。

I 花崗岩製の宝篋印塔

1. 既往の研究

現在のところ、石見銀山遺跡の銀山地区・大森地区では、中世の搬入系石造物の存在は確認されていない。対象エリアを拡げると、東部の三瓶川流域に所在する靈椿山円城寺において花崗岩製と若狭日引石製の宝篋印塔、海岸部の温泉津町において、日引石製宝篋印塔と小型板碑（石仏）が調査されている（今岡2004、今岡・今岡2004、島根県2010、鳥谷

2008、間野・伊藤2022a¹）。大田市は中世の搬入系石造物が少ない地域といえる²。

2. 靈椿山円城寺の宝篋印塔

（1）位置と現状（第1図、写真1～8）

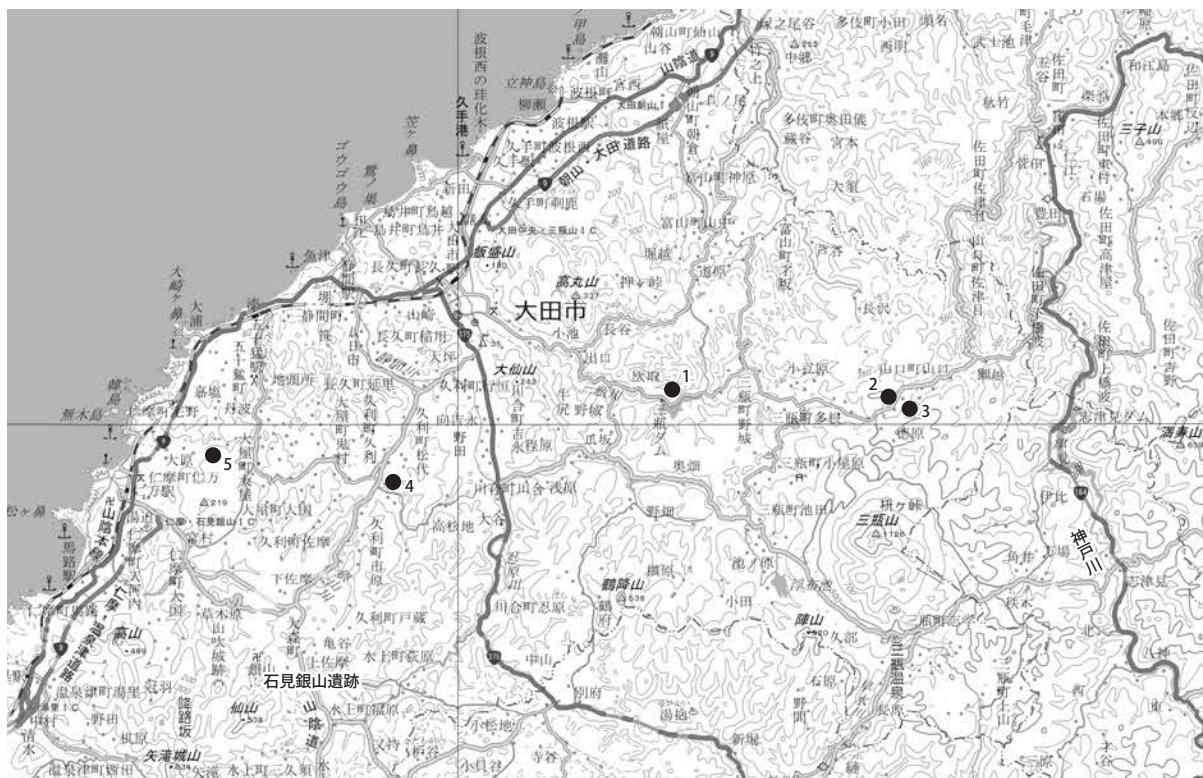
三瓶川中流域の三瓶町野城地区に位置する。承平元年（931）朝満上人の開基と伝えられる天台宗の古刹である。往古は四十八坊あり、三千石の寺領を有していたが、毛利氏・尼子氏の合戦により灰燼に帰したと伝えられる（島根県安濃郡1915）。昭和48年（1963）、「円城寺境内」の名称で、大田市の史跡及び名勝に指定されている。

石造物群は本堂前、向かって右側の平坦地にある³。基壇上に7基の宝篋印塔が組み立てられ、相輪1点が横倒しにして置かれている⁴。南西隅から反時計回りに1～7号塔、横倒しになっている相輪を8号塔とした。いずれも本来の組み合わせではなく、異なる石塔の部材が混ざり合っている。石材は花崗岩（山陽）2点、若狭日引石5点のほかは地元のデイサイト12点・凝灰岩7点・砂岩10点、計29点であった（表1・2）。花崗岩製宝篋印塔1基、日引石製宝篋印塔2基、凝灰岩製宝篋印塔2基、砂岩製宝篋印塔3基、デイサイト製宝篋印塔3基以上が復元できる。紀年銘を有する部材はないが、3号塔の基礎に「逆修 詮舜」の銘文がみられる。円城寺の僧侶などにかかわる石塔群と考えられる。

（2）花崗岩製宝篋印塔（第2図、写真4・9）

相輪と屋根のみである。

相輪は高さ32.8cmである。宝珠は径7.8cm、高さ5.6cmである。上請花は径7.7cm、高さ3.8cm。単弁八葉に間弁をはさむ。九輪は高さ15.6cmで、幅0.5cmの溝で区画する。下請花は径9.7cm、高さ3.7cm。上請花と同じく単弁八葉に間弁をはさむ。伏鉢は径4.8cm、

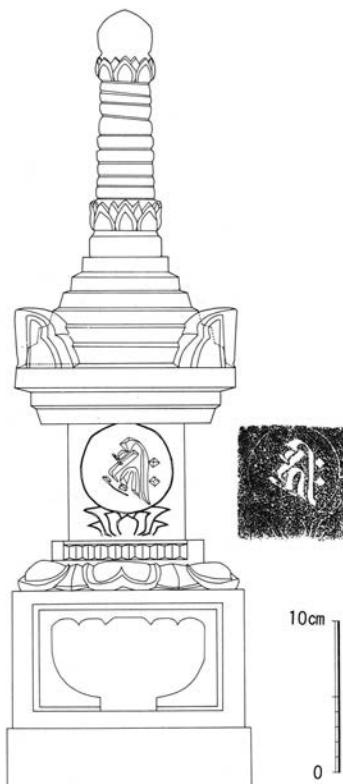


第1図 石造物調査地 位置図 (S = 1: 200,000)

①円城寺石造物群 ②瑞応寺前石造物群 ③殿屋敷遺跡 ④久利町市の上塔 ⑤宅野城跡北麓の石造物群

高さは3.5cmである。

屋根は高さ22.3cm、上面幅11.8cm、軒上幅29.6cm、下面幅21.8cm。軒上に6段、下に2段の段形をつくる。上の段形の高さは2.5~2.7cmで、最上段のみ2.0cmと低い。軒は厚さ3.8cm。隅飾突起は下から3段の段形を取り付く。二孤で軒口の少し内側から、ほぼ垂直に立ち上がり、先端間の幅は29.4cmである。基底部の幅は7.5~7.8cm、高さは4.9cm。四面とも輪郭界線を幅0.5~0.8cmの溝で彫り込み、ふくらみを表現している。



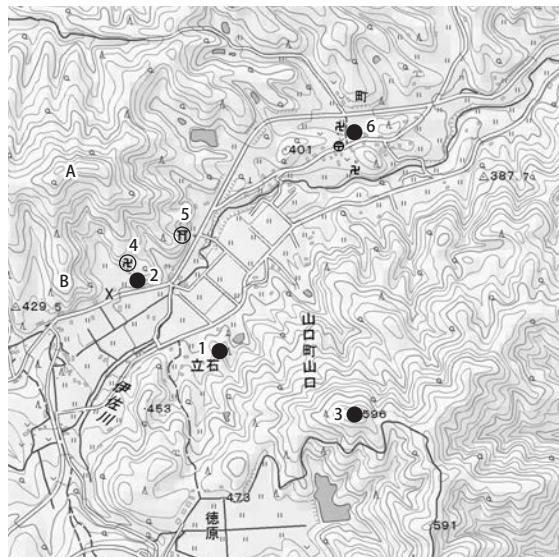
第2図 円城寺3号塔(相輪・屋根)・6号塔(塔身・基礎)(島根県大田市1990を一部改変・縮小)

3. 殿屋敷遺跡と雲洞山瑞応寺前の宝篋印塔

(1) 位置と現状(第3図、写真10)

殿屋敷遺跡と瑞応寺前の宝篋印塔は、大田市山口町に所在する。大田市南東部に位置し、三瓶山に源を発して神戸川へ注ぐ伊佐川の上流域にあたる。この一帯は近世には出雲国神戸郡山口村、明治22年に簸川郡山口村となり、昭和29年に大田市に編入されている。出雲国と石見国の国境の町である⁵。

殿屋敷遺跡は、矢筈山城跡のある山塊から南北方



第3図 山口町の石造物及び関連箇所位置図

- ①殿屋敷遺跡 ②瑞応寺前 ③矢筈山城跡
 ④瑞応寺 ⑤山口八幡宮 ⑥十王堂跡
 A「寺屋敷」カ B「寺脇」

に向て延びる丘陵先端の平坦地に位置する⁶。宝篋印塔は平坦地に祀られている古殿大明神に向かって右横にある⁷。

雲洞山瑞応寺は、殿屋敷遺跡の北西1.0kmに位置する。同寺は曹洞宗総持寺の末寺で、天正7年（1579）創建である⁸。宝篋印塔は、同寺の前を伊佐川に沿って走る県道56号大田佐田線の道路脇に置かれている⁹。

（2）殿屋敷遺跡の宝篋印塔（写真11）

屋根のみで他の部材はみられない。四隅の隅飾突起は2個を欠失し、のこりの2個も外弧を欠損している。高さは23.6cm、上面幅11.5cm、軒上幅32.0cm、下面幅23.8cmである。上面には径6.3cm、深さ4.5cmの円形のほぞ穴をもつ。段形は上6段、下2段である。上段形の高さは2.5～3.0cmで、最上段が2.3cmとやや低い。下段形は1.8cmと2.0cmである。軒は厚さ4.2cmで、軒口は直立する。下面には径8.0cm、深さ0.8cmの浅い彫り込みがある。隅飾突起は下から3段の段形に取り付く。二孤で、側面は輪郭を巻く。軒口の少し内側から立ち上がる。幅8.6cm、高さ9.5cmで3～4段目の間まである。

（3）瑞応寺前石造物群の概要（写真12）

複数の石造物が幅282cm、奥行き195cm、高さ84cmの石積基壇上に置かれている。

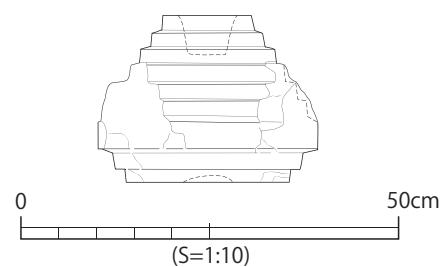
基壇の左端には、一畠薬師灯籠が置かれている。石材は三瓶山のデイサイトが用いられ、高さは105cm、幅55cm、奥行き51cmである。正面に「一畠薬師如来」、右側面には「文久元」「西秋」「福谷隼人書」「石工弥工門」、左側面に「立石中 世話人 大國 喜代介」と刻む。文久元年（1861）に立石の地域全体で寄進されたものである。大田市内ではもっとも古い一畠薬師灯籠である（川島・佐々木2004）。福谷家は瑞応寺の東に所在する山口八幡宮の社家で、隼人氏はその3代目にあたる¹⁰。

石碑の右側に、灯籠の火袋・屋根が置かれ、その右に宝篋印塔の屋根がある。宝篋印塔の奥には、石廟に入った地蔵仏が置かれる。地蔵仏は高さ35cm、幅24.5cm。両手で蓮を持つ。石廟は基壇・壁体・天井石の部材で構成され、総高は86cmである。基壇は幅48cm、奥行き44cm、高さ8cm。壁体はコ字形をし、幅38.5cm、奥行き33.0cm、高さ40cmである。左正面に「願主 田畠」と刻む。天井石は寄棟造で上下の二石からなる。下部は幅36cm、奥行き36cm、高さ11.0cm、底面を彫り込んでいる。正面には四文字を刻むが、風化のため判読できなかった。上部は寄棟で、幅48.5cm、奥行き43.0cm、高さ27.0cmである。

（4）瑞応寺前塔の概要（第4図、写真13・14）

屋根のみで他の部材はみられない。四隅の隅飾突起は欠失し、図の背面側は軒上1段目から下位が剥落している。

高さは22.0cm、上面幅11.7cm、軒上幅29.2cm、下面幅21.5cmである。上面には径7.5cm、深さ5.2cmの円形のほぞ穴をもつ。段形は上6段、下2段である。上段形の高さは2.0～2.1cmでほぼ等しい。下段形は2.2cmと1.8cmである。軒は厚さ3.6cmで、軒口は直立



第4図 瑞応寺前塔実測図

する。下面には幅6.5cm、奥行き7.0cm、深さ0.9cmの浅い彫り込みがある。隅飾突起は下から3段の段形に取り付く。図の左面は内弧の一部が遺存しており、基底部の幅は7.5cmと推定される。

4. 花崗岩製宝篋印塔の位置づけ

3塔はほぼ同形、同大であり、同時期にもたらされたものと推定される。造立年代は、14世紀後半から15世紀代前半を中心とするものと考えられる。

花崗岩製宝篋印塔は出雲南部（雲南省・奥出雲町・飯南町）に集中的に分布することが指摘されている（今岡2013）。伊佐川流域では神戸川との合流地点に位置する浄土宗智光寺跡石塔群（出雲市佐田町窪田）で宝篋印塔が確認されている（島根県佐田町1988、今岡2011）。

こうした分布状況をみると、円城寺塔および山口町の2塔は、中国山地をこえて神戸川の水運によりもたらされた可能性が高いと考える¹¹。造立された歴史的背景まで明らかにすることはできないが、当該期は在地の石塔生産が活発でなかった時期でもあり、他産地に石塔を求めたのではないかと推測される。

II 在地産の宝篋印塔

1. 既往の研究

石見銀山遺跡では16世紀後半、元亀・天正年間から白色凝灰岩を使用する「定型化」した組合せ宝篋印塔が見られるようになる。最古の紀年銘を有するのが、龍昌寺跡塔の元亀3年（1572）銘の基礎である（島根県・大田市2002）。定型化以前の様相については、縦連子と反花座、格狭間の表現に着目した以下の研究がある¹²。鳥谷芳雄は大森地区にある大森塔を「定型化した初期型式」とし、元亀3年よりも古い16世紀中頃に位置づけている（鳥谷2002）。また今岡利江は円城寺石塔群について「定型外もしくは定型が確立される過渡期の製品」とする（今岡2004）。西尾克己・東山真治は物部神社塔（大田市川合町）と真淨寺塔（同大田町）、久利町松代塔の3基について、個体差があり同一系譜と捉えるかは課題としつつ、縦連子と反花座の蓮弁の特徴から「石

見銀山の宝篋印塔の祖型」の可能性を指摘している（西尾・東山2016）。

今回の調査であらたに、縦連子と蓮弁表現に共通性のある資料を確認したので報告するとともに、石見銀山遺跡の定型化した組合せ宝篋印塔への変遷について若干の考察を加えたい。

2. 久利町市上の宝篋印塔

（1）位置と現状（第5図、写真15）

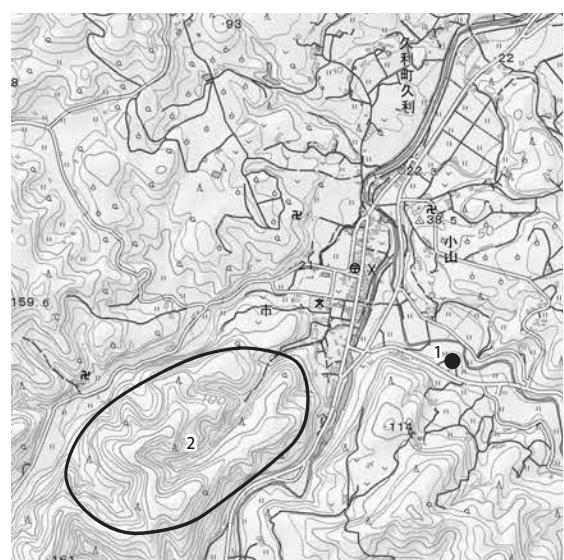
大田市久利町に所在する。この一帯は、戦国時代末まで久利氏が領有しており、石見銀山をめぐる大内・尼子両氏の争奪戦の舞台となった。久利氏の居館跡推定地や市城跡、城山城跡などの山城が分布している（山根2017）。

宝篋印塔は、石見銀山のある大森から南に流下する銀山川が、南東から流れてくる戸倉川と合流する地点の東に位置する。地蔵堂に向かって左側に屋根と相輪、種別不明の部材1点が置かれている。地蔵堂の背後は小さな残丘となり、その背後には旧道が通っている¹³。

（2）宝篋印塔の概要（第6図、写真16・17）

相輪と屋根があり、塔身と基礎はみられない。使用されている石材は砂岩である。

相輪は九輪の先端あたりで上下に折れ、ほども欠



第5図 久利町市上の上塔・市城跡 位置図
①市上塔 ②市城跡

いている。九輪部は風化が進んでいる。上下の破片を合わせた高さは51.7cmになる。宝珠は高さ12.0cm、最大径13.5cmで、丸みをおびる。請花は、高さ5.5cm、最大径12.8cm。おおきな単弁を5葉めぐらしている。九輪部の径は先端に向けて遞減する。輪は幅0.3cmほどの浅い溝で区画する。請花は最大径14.0cmあり、幅3.0cm、高さ2.5cmの小さな単弁をめぐらしている。伏鉢は高さ8.5cm、最大径は14.8cmである。

屋根は高さ32.3cm、上面幅15.2cm、軒上幅30.1cm、下面幅24.4cmである。上7段の段形を作る。1段目から6段目は高さ2.1~2.7cmあり、7段目は低く1.5cmである。軒の厚さは6.0cmで、段形にくらべて厚い。軒口は斜めになる。隅飾突起は単孤で外反する。基部幅が9.0cm、高さ13.5cmである。図左の隅飾突起は先端を欠失し、先端間の幅は現状で34.3cmある。側面には内孤に沿って、幅0.5cmの細い線彫りで弧状の線を刻む。弧状の線は軒3段目のあたりで、鉤形に曲がっている¹⁴。軒下には高さ5.7cm、幅27.1cmの蓮弁を表現する。中央と隅に覆輪付き複弁を配し、あいだに単弁をはさんでいる。その下の段形は高さ

3.0cmで、側面に幅0.5cm、深さ0.3cmほどの縦方向の溝を11本以上刻む。下面是縁を4.0cm残して、深さ2.0cm彫り込んでいる。

3. 宅野城跡北麓の宝篋印塔

(1) 位置と現状(写真18)

大田市宅野町に所在する。この地域は、中世に宅野別符が成立し、戦国時代以降は宅野村ともいわれた。戦国時代までは益田氏の領地で、庶流である宅野氏が所領していたと推測されている。永禄5年(1562)以降は毛利氏の領地となっている。

石造物群は、北前船の寄港地でもあった宅野港から南東にむけて広がる平野の最奥部に位置する¹⁵。石塔群の南には、宅野氏の拠城と伝わる宅野城跡がある。石造物は、コンクリートブロック積み基壇のうえに南面して祀られた祠の背後に集積されている。内訳は組合せ宝篋印塔の部材7点と不明1点である。石材はすべて白色凝灰岩が使用されている。祠に向かって三列(組)並べられている。右を⑧③④、中央を①②、左を⑤⑥⑦⑨とした。今回は実測調査を行っていないため、概要のみを記述する。

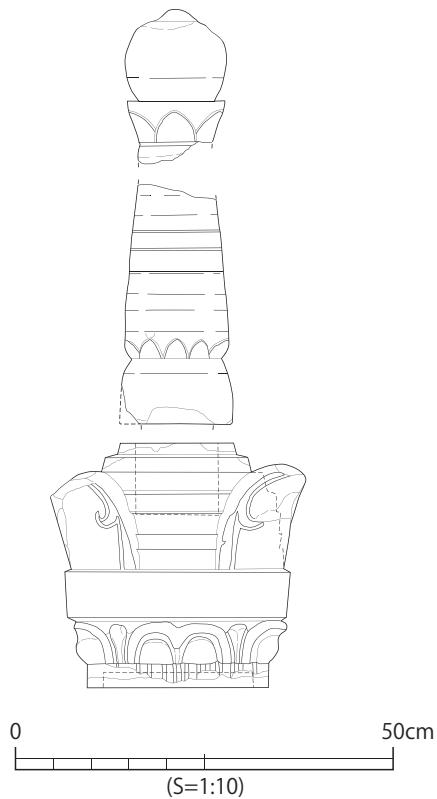
(2) 概要(写真19~22)

①宝篋印塔屋根

軒上の段形3段目から上位を欠失する。四隅の隅飾突起は1カ所のみ残存している。高さは20.0cm以上、軒の幅27.5cm、下面幅21.3cmである。上面に径6.6~7.2cmの円形のほぞ穴をもつ。段形は軒上が3段以上、下は2段である。段形の高さは2.2~2.5cm。軒は厚く8.5cmある。隅飾突起は単孤で、高さは7.0cm以上ある。側面は無地である。

②宝篋印塔基礎

高さ26.5cm、上面幅19.5cm、側面高19.6cm、側面幅30.0cmである。上端は反花座とし、上に縦方向の溝を刻む。反花座は中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁を配し間弁をはさむ。縦方向の溝は12本ある。溝は薬研彫りしてあり、幅1.0cm、高さ2.5cm、深さ0.6cmである。側面は四面とも幅0.8cm、深さ0.5cmの溝で、幅24.5cm、高さ13.8cmの輪郭を巻く。



第6図 久利町市の上塔実測図

③宝篋印塔塔身

幅15.0cm、高さ10.4cmである。上下面とも平坦である。四面には、金剛界四仏種子を側面いっぱいを使って刻んである。

④宝篋印塔相輪

九輪の途中から下位を欠失する。残存高は24.5cm。宝珠は径10.9cmで下位に重心がある。先端に径3.2cmの突起をもつ。上請花は径13.0cm、高さ6.0cm。蓮弁表現はなく無地である。九輪は浅い線刻により区画する。

⑤宝篋印塔基礎

上面を欠失している。高さは25.4cm以上、上面幅18.8cmである。側面の高さは19.6cm、幅28.0cmで、上端は反花座とする。反花座は中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁を配し間弁をはさむ。②とは違い縦方向の溝はない。側面は四面とも幅0.8cm、深さ0.5cmの溝で、幅24.0cm、深さ12.8cmの輪郭を巻く。

⑥宝篋印塔塔身

上下面とも一部を欠失している。高さ14.5cm以上、幅は18.0cmである。四面には金剛界四仏種子を、側面いっぱいを使って刻んである。

⑦宝篋印塔屋根

高さ16.5cm、軒幅27.0cm、下面幅20.5cm。段形は軒上に4段、下に1段を作る。軒下の段形には縦方向の溝を刻んでいる。上段形の高さは、1～3段目が2.0cm前後で、4段目が2.6cmある。軒と隅飾突起は幅0.8cm、深さ0.5cmの溝で区画する。隅飾突起は単孤で高さ6.0cm、幅8.2cmである。側面の文様は市の上塔と同じで、内孤に沿った線の中央が鉤形に曲がっている。下段形は高さ3.0cmで、側面には縦方向の溝を13本刻む。溝は幅1.0cm、深さ0.5cmあり、軒下から下面までつながっている。

⑧不明

宝篋印塔相輪か五輪塔空風輪の可能性がある。ほどを欠失する。高さ21.5cm以上、宝珠(空輪)径11.2cm、請花(風輪)下面の径は11.5cmである。

⑨宝篋印塔屋根

屋根の残欠である。残存する高さは12.0cm、幅13.3cmである。段形は上3段以上、下1段である。

軒は厚さ5.3cmある。隅飾突起は内孤の一部がのこる。高さは5.1cm以上である。下段形は高さ2.4cmで、側面は無地である。

(3) 部材の組合せ

縦方向の溝を有する屋根①と基礎⑤、溝のない屋根⑦と基礎②がそれぞれ組み合うものと復元できる。この2組のどちらかに塔身⑥が組み合う。塔身③は2組と法量が合わないので、別の部材と考えられる。

4. 宝篋印塔の特徴と年代的位置づけ

(第7図、表3～4、写真23～27)

市の上塔と宅野城跡北麓の石塔(以下、宅野塔)の屋根・基礎について、龍昌寺跡塔、大森塔、松林寺遺跡2区出土品(島根県2019第79図203。以下、松林寺塔)、真淨寺塔と形態的特徴を比較する¹⁶。

(1) 屋根

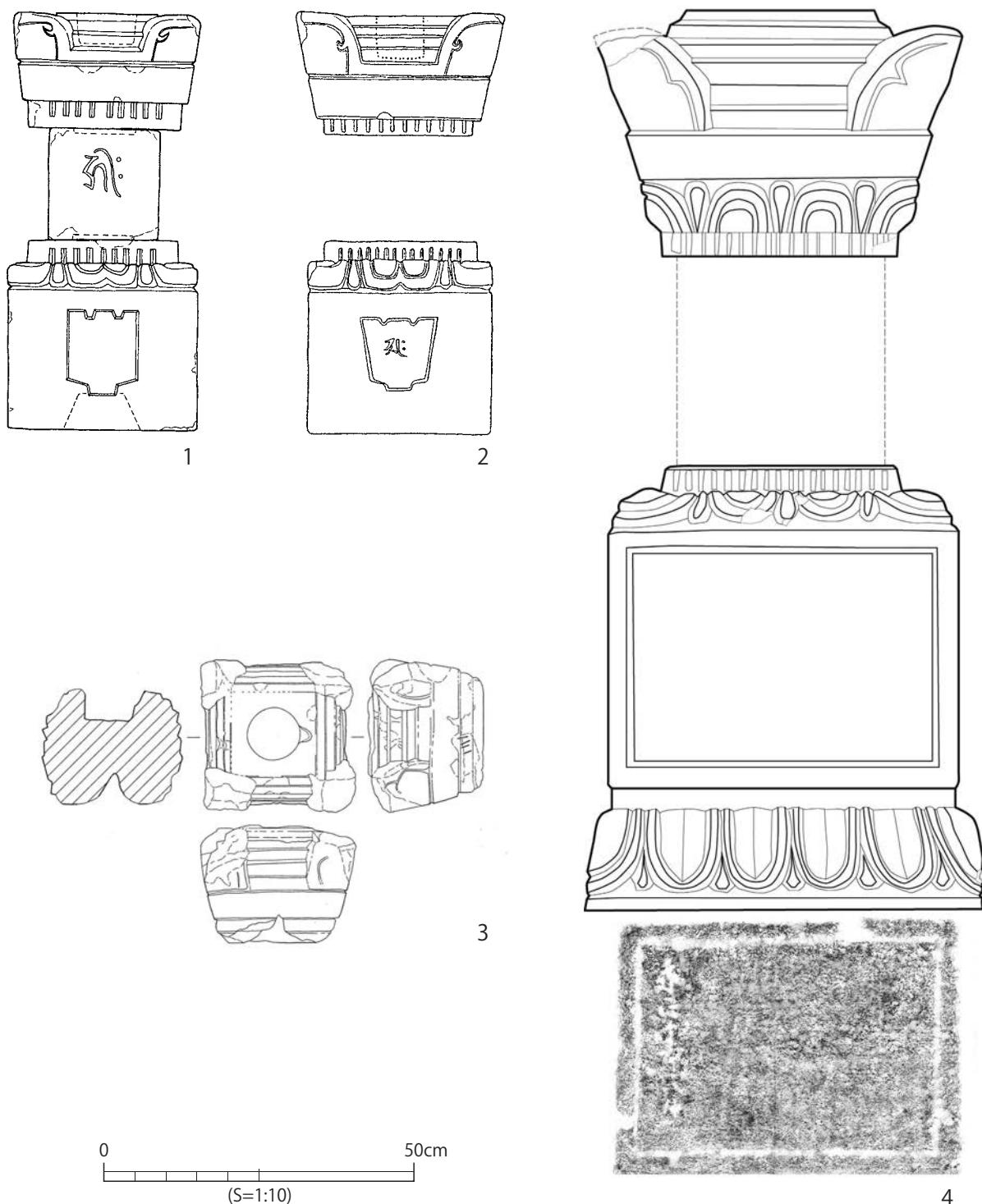
特徴 段形の数と装飾表現に差異がみられる。上段形は3段から7段、下段形は1段と2段がある。下段形は、無地のもの(宅野塔①、松林寺塔)と装飾表現がみられるものに大別される。装飾表現には、請花と縦方向の溝を表現するもの(市の上塔、真淨寺塔)と、縦方向の溝を刻むもの(宅野塔⑦、大森塔、龍昌寺跡塔)がある。

上段形と隅飾突起の彫出表現をみると、別々に彫出するもの(市の上塔、宅野塔①・⑦、松林寺塔、真淨寺塔)と、それを一体で作り出すもの(大森塔と龍昌寺跡塔)がある。松林寺塔・宅野塔⑦・大森塔・龍昌寺跡塔のように、軒と隅飾突起のあいだを溝で区画した簡略なものもみられる。

隅飾面の文様は、松林寺塔と宅野塔①を除き、内孤に沿った線が中ほどで鉤形に曲がっている。松林寺塔は内孤に沿って二孤(連続する孤)の線を刻み¹⁷、宅野塔①は無地である。

変遷 軒と上段形、隅飾の彫出方法、隅飾面の文様に着目する。

軒・軒上段形・隅飾突起を別々に彫出するものから、軒と隅飾突起を溝で区画し、上段形は別に彫出するもの、軒と隅飾突起を溝で区画し、隅飾突起と上段形と一体で作り出すものへ変化したと



第7図 関連石塔実測図

- 1 大森塔（鳥谷2002） 2 龍昌寺跡塔屋根・基礎：元龜3年銘（島根県・大田市2002）
 3 松林寺塔（島根県2019） 4 真淨寺塔（西尾・東山2016）

考えられる。

既往の研究から隅飾突起は、おおまかに二孤から单孤へ、側面は輪郭巻から輪郭を省略し内弧のみを片切彫り・線彫りしたものへ変化していくと

考えている。内孤に沿って二孤を線彫りするものから、鉤形に曲がる文様へ変遷したと考えられる。

（2）基礎

特徴 いずれも反花座で、宅野塔⑤以外は、すべて

上段形に縦方向の溝を刻む。反花座の蓮弁は、真淨寺塔以外は同じ配置だが、その表現が異なっている。宅野塔②・⑤は丸みのある曲線で立体的に刻出している。ほかは直線的で浅い扁平な作りで、中央の複弁を分画する区画線も最後まで伸びていない。後者はより退化した形態といえる。側面は宅野塔②・⑤が枠線しかなく、大森塔・龍昌寺塔には独特な格狭間が表現されている。

変遷 文様表現と蓮弁の彫成方法に着目する。縦方向の溝がなく蓮弁は立体的表現をしたものから、縦方向の溝を有し、蓮弁を立体的に表現したものへ、そして縦方向の溝を有し、蓮弁の彫りが浅く扁平なものへ変遷したと考えられる。側面も輪郭のみのものから、あらたに直線的で独特な形態をした格狭間が意匠化される。

(3) 宝篋印塔の変遷

屋根の変遷から、以下の古～新段階を設定する。

古段階 屋根の軒・段形・隅飾突起を別々に造作し、縦方向の溝がないものを当該期とした。白色凝灰岩製の宅野塔①で構成される。

基礎は宅野塔①に組み合う⑤が当該期に位置づけられる。反花座は立体的で縦方向の溝がなく、側面は輪郭のみである。

中段階 隅飾突起と上段形は別々に造作するが、古段階よりも簡略化・装飾化したものを当該期とした。白色凝灰岩製の宅野塔⑦・松林寺塔と砂岩製の市の上塔・真淨寺塔で構成される。隅飾突起と軒は市の上塔と真淨寺塔が別作り、宅野塔⑦と松林寺塔は溝で分割する簡略な作りである。隅飾面の表現は、真淨寺塔と松林寺塔は内弧に沿った二弧の線を刻み、市の上塔と宅野塔⑦は「鉤形」文様である。軒下段形は、市の上塔と真淨寺塔は上段を請花、下段を縦方向の溝で飾る。宅野塔⑦は1段で側面に縦方向の溝を刻み、松林寺塔は2段で側面が無地である。基礎は宅野塔⑦と組み合う②が該当する。立体的な反花座を縦方向の溝で飾り、側面は輪郭のみである。縦方向の溝は、屋根・基礎とも側面の上端から下端まで貫通している。

新段階 隅飾突起と上段形は一体で造作し、隅飾面

の文様は「鉤形」、軒下に「縦方向の溝」を刻むものを当該期とした。白色凝灰岩製の大森塔・龍昌寺塔で構成される。

基礎は大森塔と龍昌寺塔が当該期に相当する。側面に独特な格狭間が出現するのが、大きな特徴である。反花座の構成は中期と同じだが、直線的で扁平な彫りに変化する。縦方向の溝は中期と異なり、貫通せず途中から刻まれている。定型化した組合せ宝篋印塔が確立した段階と位置付けられる。紀年銘を有するものに、真淨寺塔と龍昌寺塔がある。前者は「永正十□□八月」(1513～1517)銘、後者が元亀3年(1572)銘である。この紀年銘は、属性の前後関係とも矛盾しない。大づかみに、古段階は16世紀前半、中段階は16世紀中頃、新段階は16世紀後半としておきたい。

新段階はおおきな画期として捉えられる。屋根段形と隅飾の一体化、直線的で扁平な反花座への変化は大量生産のためと考えられる。その背景には石見銀山における需要の高まりがあったと想定される¹⁸。こうした生産の増大に対応できたのは、古・中段階にかけて、在地における石工集団の活動が活発化していたためであったと考えられる。中段階に出現した縦方向の溝と鉤形文様、そして新段階の特徴である独特な格狭間の意匠は、創造性豊かな石工集団の存在を伺わせるものである。

おわりに

本稿では、石見銀山遺跡の周辺で新たに確認された搬入品と在地品について報告し、若干の考察を試みた。既往の研究では、石見銀山遺跡の定型化した宝篋印塔の相輪・屋根の意匠について、周辺地域に類例を求めることができないとされていた(守岡2011)。しかし、周辺地域での調査の進展により、在地品のなかで定型化への変遷過程を見通せるようになったことは、大きな成果といえる。

今回は限られた資料のみを対象として取り上げたため、搬入品の影響を含めて精緻な分析がおこなえていない。あらためて詳細な検討を加えたいと考えている。

石見銀山遺跡の緩衝地帯を含めた周辺地域の石造物調査はほとんど手付かずといってよい。今後も継続して周辺地域の調査に取り組む必要があることを、あらためて記しておきたい。

謝辞

令和4年7月9日、三瓶小豆原埋没林公園で開催された「月イチガク④墓場放浪記～石塔から探る石見の歴史」の報告を終えた帰路、瑞応寺前塔を発見したことが執筆にいたった切っ掛けである。報告の機会をいただいた中村唯史氏に心より感謝申し上げる。また現地調査及び本稿の作成にあたっては下記の方からご高配を賜った。明記して感謝申し上げます。

円城寺 瑞応寺 島根県埋蔵文化財調査センター
石橋悦雄 大國晴雄 坂根孝義 佐藤亜聖
須藤光行 常松育夫 松田義光 松浦義彦
宮本正保 目次謙一 森山 譲 森山賢勝
山下英治

¹ このほかにも、温泉津町内において花崗岩製五輪塔火輪や日引石製などの小型板碑（石仏）が確認されている（間野2023）。

² 県内の石造物を概観した既往の研究では、円城寺の花崗岩製宝篋印塔が、完全な組み合わせで残っていないためか、取り上げられていない（今岡2013）。

³ 既往の研究では、大田市教育委員会によってはじめて実測図が紹介されている（島根県大田市1990）。その後、今岡稔と今岡利江がすべての石造物を調査・報告している（今岡2004、今岡・今岡2004）。

⁴ 石造物群は、平成30年4月9日、大田市東部を震源として発生した震度5強の地震により被災し、復元された。今岡稔と今岡利江が2004年に行った調査時とは、組み合わせが変わっている。

⁵ この地域の石造物は、十王堂のなかに安置された奪衣婆像が知られていた（原1984）。十王堂は平成31年4月に解体され、石造物は円城寺に移された。現在、同寺の境内にある山王権現社に奪衣婆像と十王像3体、別の堂内に十王像7体と阿弥陀と地蔵仏2軀が安置されている（写真28・29）。

⁶ 矢筈山城については、城主が富永兵庫守、山麓にある「殿屋敷」は城主の屋敷跡、その付近にある「五輪塔」は城主の

墓と伝えられている（簸川郡山口村役場「村誌」）。富永氏は尼子氏の家臣で、のちに毛利氏に降ったとされる。矢筈山城と同じ国境の城、山中要害山城（大田市富山町）の城主としても伝えられる（高屋2017）。

⁷ 古殿大明神は八百萬大神を祭神とする。享保13年の創建で、現在の社殿は昭和62年（1987）に再建された（昭和62年3月28日記「古殿大明神御社由緒」）。

⁸ 瑞応寺の創建以前に「瑞応山」の「寺屋敷」と呼ばれる場所に真言宗寺院があり、移転に際して曹洞宗に改宗したのではないか、と伝えられる（簸川郡山口村役場「村誌」）。

寺屋敷については、瑞応寺の森山賢勝御住職から以下のとおり御教示をいただいた。現在地から北西の丘陵上に、寺跡らしき遺構（石垣・井戸）がみられる（第3図A）。この場所を「寺屋敷」とは呼んでいない。寺は山崩れにより、いったんは同じ丘陵の南端、屋号「寺脇」と呼ばれる場所（第3図B）に移り、そのち現在地に移転した。

⁹ 県道56号大田佐田線の工事の際、現在地に後退させているとのことである（大國晴雄氏のご教示による）。

¹⁰ 福谷隼人氏は文久3年に亡くなっている（大國晴雄氏のご教示による）。また野井神社先代宮司、朝倉久善氏が記録した山口八幡宮の文政4年（1824）と嘉永7年（1860）の棟札写に「福谷隼人」の名前がみられる。なお朝倉氏が記録した大田市内の棟札等の資料は、朝倉由貴子宮司のご厚意により写真撮影をさせていただいた。

¹¹ 花崗岩製品は邑南町でも確認されている（今岡2013）。江の川支流八戸川の最上流部に位置する高畠石塔（邑南町市木）は、報告した3塔と同型・同大の宝篋印塔とみられる（松本1991）。

¹² 石見銀山遺跡の総合整備計画策定にあたって、石造物の考古学的調査がはじめて行われた。このとき調査を担当した蓮岡法暉は、天正・慶長期の一石五輪塔・組合せ宝篋印塔、無縫塔の「基礎上部の反花座とその上の塔身を受ける方形台状の段の彫刻には極めて特徴的な様式」があるとし、「この地方のこの主の石造物の重要なポイントになる」ことをすでに指摘している（蓮岡1987）。

¹³ 久利町2009には、昭和14年（1939）頃の道路改修工事に伴い、小さな丘を切り崩したところ、頭だけの骨が出てきた、武士の頭だけを持ってきて埋めたのではないか、と記されている。

¹⁴ この文様について、宮本徳昭は「中央に外側に突起がある」（宮本1999）、池上悟は「内側中央が小さく巻き上がる」（池上2002）、守岡正司は「外側に向かって小さく鍵状に巻き上がる」（守岡2004）と表現している。

¹⁵ 平成25年6月10日、田中義昭氏と池上悟氏による石造物調査指導会で指導いただいた。

¹⁶ 円城寺石塔群および旧邇摩郡所在の石塔との属性比較はあ

らためて行いたい。

¹⁷ 報告書（第7図3 右面の左側）では、下弧の線が上弧との接点より左に伸びているが、実見したところ、接点から左は剥落によるものであった。

¹⁸ 西尾・東山は需要の増大に伴い使用石材もデイサイト・砂岩・凝灰岩から軟質の福光石・白色凝灰岩に変化したとする（西尾・東山2016）。

【参考文献】

- 池上悟2002「特徴的墓塔の様相」『石見銀山遺跡石造物調査報告書2 龍昌寺跡』島根県教育委員会・大田市教育委員会
石橋悦雄2009『旧山口村郷土の歴史』
今岡利江2004「島根県の情報」『日引第5号』石造物研究会
今岡稔2013「島根県の石造物と益田の御影石製石造物」『御影石と中世の流通－石材識別と石造物の形態・分布－』高志書院
今岡稔・今岡利江2004「山陰の石塔二三について－11－」『島根考古学会誌第20・21集合併号』島根考古学会
今岡利江・今岡稔2011「山陰の石塔二三について－17－」『島根考古学会誌第28集』島根考古学会
川島武良・佐々木敬志2004「写真集 一畑薬師灯籠を訪ねて（その2）」『古代文化研究No.12』島根県古代文化センター
久利町老人クラブ寿会2009「地蔵さんと武士の墓について」『郷土誌ふるさと久利』
坂根兵部之輔1967（2004再版）『靈椿山圓城寺』靈椿山圓城寺
佐藤亜聖2016「石塔の定型化と展開」『十四世紀の歴史学－新たな時代への起点－』高志書院
佐藤利江2020「山陰の石造物概観と倉吉古石塔の編年について」『中世石造物の成立と展開』高志書院
島根県大田市教育委員会1984『大田市埋蔵文化財調査報告4 三瓶川流域遺跡他詳細分布調査II－大田市内遺跡一覧・地図－』
島根県大田市教育委員会1989『大田市文化財調査報告第1集 野城の民俗－島根県大田市－－三瓶川総合開発事業に伴う文化財調査報告1－』
島根県大田市教育委員会1990「圓城寺関連石造物群」『大田市埋蔵文化財調査報告書11 久谷たたら跡－三瓶川総合開発事業に伴う埋蔵文化財調査2－』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2 龍昌寺跡』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10 金剛院墓地・本谷周辺・中小路の石造物』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2021『石見銀山遺跡石造物調査報告書20－保国山金皇寺（仁摩町大国）－』

島根県教育委員会2017『高原遺跡（3区）・中尾H遺跡（4区）・門遺跡（2区）』

島根県教育委員会2019『垂水遺跡 松林寺遺跡 庵寺石塔群』
島根県佐田町教育委員会1988『佐田町の遺跡 窪田地区』
鳥谷芳雄2002「大森地区の一石五輪塔・組合せ宝篋印塔」『石見銀山遺跡調査ノート1』島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会
鳥谷芳雄2008「温泉津金剛院の宝篋印塔基礎について」『石見銀山遺跡調査ノート7』島根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己・東山信治2016「大田市内の中世石造物」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究6』島根県教育委員会・大田市教育委員会

蓮岡法暉1987「紀年銘のある石造物について」『石見銀山遺跡 総合整備計画策定報告書』島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会

原 宏一1984「奪衣婆像」『野の石－山陰の石仏めぐり－』
松本岩雄1991「位置と環境」『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III』島根県教育委員会

間野大丞・伊藤徳広2022a「テーマ別調査研究「港町温泉津の景観と変遷」における石造物調査－中間報告－」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究12』島根県教育委員会・大田市教育委員会

間野大丞・伊藤徳広2022b「保国山金皇寺石造物調査報告（補遺）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究12』島根県教育委員会・大田市教育委員会

間野大丞2023「中世石造物からみた温泉津」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5 港町温泉津の景観と変遷』島根県教育委員会・大田市教育委員会

宮本徳昭1999「石造物調査報告書 第2章 石造物群の概要と特徴」『石見銀山遺跡総合調査報告書第3冊 城跡調査・石造物調査・間歩調査編』島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会

三谷晃1977『大田碑石散歩』

守岡正司2004「島根県簸川郡多伎町所在の石塔」『来待ストーン研究5』モニュメント・ミュージアム来待ストーン
守岡正司2011「石見銀山遺跡石造物の概要」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』島根県教育委員会・大田市教育委員会

山根正明2017「市城跡」『石見の山城』高屋茂男編 ハーベスト出版
有限会社平凡社地方資料センター 1995『日本歴史地名体系第33巻 島根県の地名』平凡社

表1 円城寺宝篋印塔一覧

番号	相輪	屋根	塔身	基礎	基壇	今岡2004の挿図番号
1	デイサイト (気泡多い)	デイサイト (三瓶か大江高山)	砂岩	砂岩	砂岩	第7図5
2	砂岩	凝灰岩	デイサイト (細かい)	砂岩	砂岩か凝灰岩	第7図4
3	花崗岩 (山陽)	花崗岩 (山陽)	凝灰岩	凝灰岩	デイサイト	相輪・屋根: 第8図7 塔身・基礎: 第6図3 基壇: 第8図7
4	安山岩 (日引石)	安山岩 (日引石)	安山岩 (日引石)	安山岩 (日引石)	砂岩	第6図2
5	砂岩	凝灰岩	砂岩	デイサイト (細かい)	凝灰岩	第5図1
6	デイサイト (細かい)	デイサイト (細かい)	安山岩 (日引石)	デイサイト (細かい)	デイサイト (細かい)	相輪・屋根: 第8図6 塔身・基礎: 第8図7 基壇: 第6図3
7	砂岩	デイサイト (気泡多い)	砂岩	砂岩	デイサイト (気泡多い)	相輪・屋根: 第6図3 塔身・基礎 基壇: 第8図6
8	凝灰岩	—	—	—	—	第6図3

表2 円城寺宝篋印塔 石材・部位別数量

石材	相輪	屋根	塔身	基礎	基壇
凝灰岩	1	2	1	2	1 + 1 ?
砂岩	3		3	2	2 + 1 ?
デイサイト(大江高山・三瓶)	0	1	0		0
デイサイト(そのほか)	2	2	1	2	3
安山岩(日引)	1	1	2	1	0
花崗岩	1	1			

表3 組合せ宝篋印塔屋根の属性一覧

名称	石材	上段形の数	軒	隅飾突起			側面文様	下段形		段階
				軒との取り付き	外形	段形との取り付き		段数	側面	
久利町市の上塔	砂岩	7	あつい	別作り	単孤	別作り	内孤に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	2	請花・縦方向の溝	中
宅野城跡北①	白色凝灰岩	(3)	あつい	別作り	単孤	別作り	なし	2	無地	古
宅野城跡北⑦	白色凝灰岩	4	あつい	溝で区画	単孤	別作り	内孤に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	1	縦方向の溝	中
大森塔	白色凝灰岩	4	あつい	溝で区画	単孤	一体	内孤に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	1	縦方向の溝	新
龍昌寺跡 (第22図162)	白色凝灰岩	5	あつい	溝で区画	単孤	一体	内孤に沿った線。中ほどで鉤形に曲がる	1	縦方向の溝	新
松林寺遺跡 (第79図303)	白色凝灰岩	6	あつい	溝で区画	単孤	別作り	内孤に沿った二孤の線	2	無地	中
真淨寺塔	砂岩	7	あつい	別作り	単孤	別作り	内孤に沿った線	2	請花・縦方向の溝	中

表4 組合せ宝篋印塔基礎の属性一覧

名称	石材	反花座				側面	段階	備考
		上端	彫出	蓮弁配置				
宅野城跡②	白色凝灰岩	縦方向の溝	曲線的。深い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ		枠線のみ	中	
宅野城跡⑤	白色凝灰岩	無地	曲線的。深い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ		枠線のみ	古	
大森塔	白色凝灰岩	縦方向の溝	直線的。浅い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ		格狭間のみ	新	
龍昌寺跡 (第22図164)	白色凝灰岩	縦方向の溝	直線的。浅い	中央に覆輪付き複弁、隅に覆輪付き単弁。間弁をはさむ		格狭間のみ	新	元亀3年(1572)銘
真淨寺塔	砂岩	縦方向の溝	曲線的。深い	中央に間弁。左右と隅の覆輪付き単弁に間弁をはさむ		枠線のみ	中	「永正十□□八月」 (1513~1517)銘



写真1 霊椿山円城寺の石造物群



写真2 円城寺1号塔



写真3 円城寺2号塔



写真4 円城寺3号塔



写真5　円城寺4号塔



写真6　円城寺5号塔



写真7　円城寺6号塔



写真8　円城寺7号塔

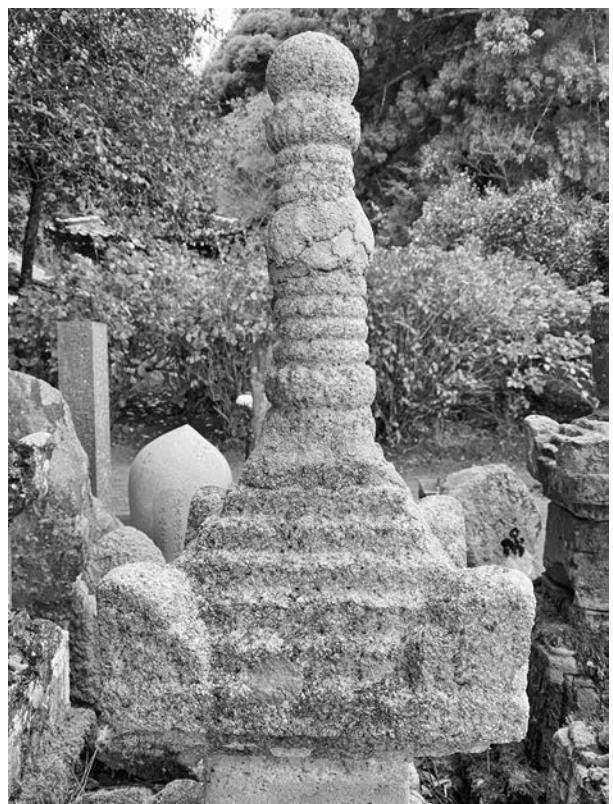


写真9　円城寺3号塔の相輪・屋根



写真10 古殿大明神と殿屋敷遺跡の宝篋印塔



写真11 殿屋敷遺跡の宝篋印塔

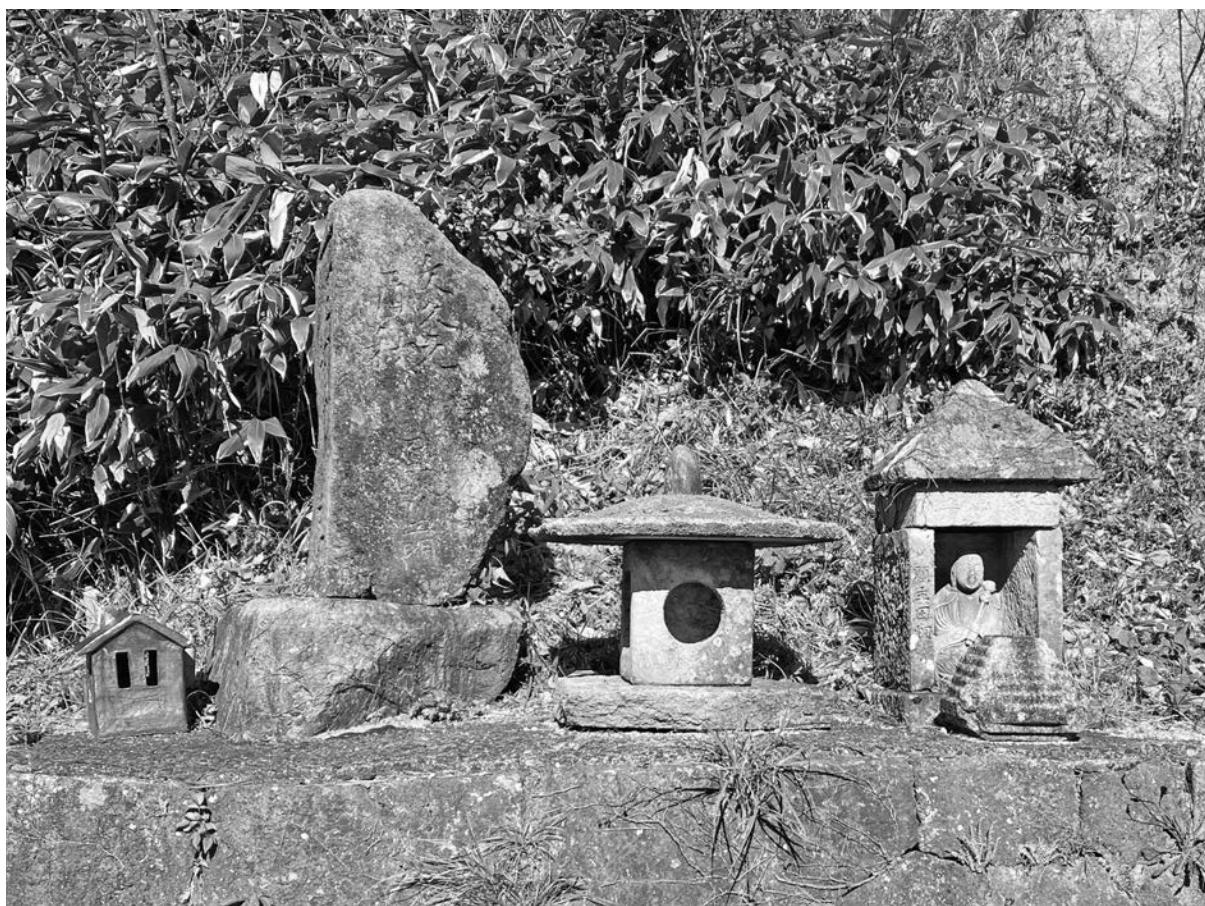


写真12 瑞応寺前の石造物群



写真13 瑞応寺前の宝篋印塔（正面）



写真14 瑞応寺前の宝篋印塔（斜め上から）



写真15 久利町市の上 地蔵堂と宝篋印塔



写真16 久利町市の上宝篋印塔屋根



写真17 久利町市の上宝篋印塔相輪



写真18 宅野城跡北麓の石造物群



写真19 宅野城跡北麓の石造物 上から①②



写真20 宅野城跡北麓の石造物群 上から⑨⑦⑥⑤



写真21 宅野城跡北麓の石造物群②



写真22 宅野城跡北麓の石造物群④



写真23 宅野城跡⑦隅飾突起



写真24 市の上塔 隅飾突起



写真25 真浄寺宝篋印塔の屋根 (正面)



写真28 旧山口町十王堂の石造物
(手前が奪衣婆像)



写真26 真浄寺宝篋印塔の屋根 (斜め下から)



写真27 龍昌寺跡元龜3年銘宝篋印塔 (基礎)
(大田市教育委員会所蔵)



写真29 旧山口町十王堂の石造物